

大寺家の移民

玉 広あった大寺孫八という家の話として、明治二十八年に北海道空知郡奈江村に移民し、しばらくして同じ空知郡岩見沢村に転入しているが、明治三十一年の大洪水災害に見舞われた。それは石狩川流域の農地の七五%が全滅し、死者二四八人・家屋損害三五五戸・浸水家屋二四〇〇戸の被害を蒙った。大寺家も被害に遭い開拓を断念し帰郷し、一時金戸の宮本家に仮住まいした後、福野の本江に移っている。

移民の多くは全財産を使い果たしてしまうのですが、その大寺家は五反余の財産を北海道に移民の折に処分し、万が一のことを想定し郵便局に二〇〇円の貯金を残していったことが幸いし再起が叶った希な家でした。この大寺家の跡地が今の種川家であり、この一帯は往古から金戸や野田の飛地で、宝暦の水騒動の原因となった場所です。

移民の背景には地租改正・旱魃・ウシカノ発生が大きな原因といわれるが、この地区を流れる原川にもあった。

藩政時代は加賀藩が管理し補修に際しても、藩の補助や原川懸かり地区で負担をしていたのですが、明治維新以後は藩の補助がなくなり、地元も村全体で負担でなく受益者負担となった。

四 年で帰郷した大寺家の祖母やをの体験談に、「たった四年で帰ってくるがやったら、なんでまた北海道なんかへ行ったがケ」と孫が問うたときに、祖母が顔色を変え語気も荒々しく、次のように語っています。

「国広はどんな所か知らんから言うがヤ、田圃の水は代掻の時分から不足がちやった。それでも田植えの節になりや植えにやあかん。植えたあとの稲は、一番水を欲しがるときヤ。そんな大事なときでも、川の水はいつも細い。水が足らんさかいに、くる年も、来る年もろくなコメ取れなんだがヤ。そのうえ、税金は上がるし、子供もできる、このままやったらこの末どうなることやらと考えたら、心配で心配で、食事も喉を通らんくらいに悩んだヤ。したらオマエ、北海道ちゆうとこへ行つて開くさえすりや、その地面は自分のものになるといふ話が聞こえてきた。そして「あの人か」という程の人までも北海道へ行くといふ話まで出てきたら、国広の三郎ぐらい北海道へ

行つてあたり前という気持ちやつたがヤ」と。

砺波地方の真宗移民

元々真宗は全国で第一位の二八%の宗派別寺院率があります。開拓に東西本願寺が積極的に勧誘したので、北海道では五三%と過半数を占めています。北陸の真宗門徒は「阿弥陀如来尊像と先祖の法名を必ず持参した」とあるように、移住した真宗門徒は二年目には講を中心として「団体民協力して真宗説教所」を建てた云われているのです。特に砺波地方の移民は「宗教心に篤く風俗質敦厚にして能く一致和合し勤儉一意家業の隆盛を図れり」とか「団体民は質素を旨とし奢侈を戒め賭博の如きは絶えて之を為す者なし」と云われたのでした。



